
とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

座標移動は強いと思います

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるもしもの座標移動^{↑ポイント}

【Nコード】

N4531Y

【作者名】

座標移動は強いと思います

【あらすじ】

結標さんに憑依した人のお話です。

結標さんが

かなりチート化したり原作のストーリーが変わったりしています。ご注意ください。

憑依したのは座標移動

みなさんは、もし禁書の世界のキャラに憑依出来るとしたらどのキャラを選ぶ？

私だったら右方のフィアンマとか一方通行辺りに憑依したいと思う。だって無双したいもん。

ああ、垣根や軍覇辺りもいいかも。アイツ等無限の可能性があるイメージあるし。

「……むすじめ あわき結標淡希。という事は能力は座標移動↑ポイントか……微妙」

鏡に映る長い赤毛をお下げ髪のように耳より低い位置で左右に結つて、背中の方へ流している女の子を見てそう確信した。

しかし、服装は原作の痴女みたいなサラシミニス力では無く、普通の白い半袖のカッターシャツにプリーツスカートという極普通の服装だった。

……だが、これどこの制服？ 原作の結標が所属する霧ヶ丘の制服ではないが……もしかしたら中学生時代の結標なのだろうか。

まあそれはともかく。

座標移動、か。弱い能力では無いと思うのだが、なんだかなあ。

上手く使えばかなり強力な能力だが、如何せん一方通行や未元物質みたいな派手さはないし、正面突破じゃおらあああ！！があまり出来そうにない能力なんだよね。

しかし……無能力者とかに憑依しちゃうより遙かにましか。いや、上条さんは例外だけだね。

「とりあえず能力使ってみますか」

私は鏡から一メートル程離れた位置に落ちている学生鞆に目を向ける。

手のひらを広げ、鞆を掴む用意をする。

「来い、鞆！」

無音で鞆が私の顔の前十センチ前くらいに空間移動してきた。

「うおっと！」

落ちてくる鞆を慌てて両手でキャッチする。

どうやらまだ座標の指定が甘いようだ。

まだ中学生の頃の結標だし、演算能力が足りないのかな。それにしても、部屋の中だけでは情報量が少なすぎる。

「外に出てみるか」

学生寮を出ると、通りにちらほら私と同じ制服を来ている人達が歩いているのが確認出来た。

飾りつきの無い黒い折り畳み式の携帯で時刻を確認してみると、7:58と表示されている。成る程、今は登校時間のようだ。学校までどれくらいの距離があるか知らないけど。

とりあえず登校してる子達に着いていこう。

「あいたっ！」

「いよう、優等生！」

突然誰かに背中を思い切り叩かれたようだ。

かなりイラッとした私はソイツを思い切り睨み付ける。

「いつもは三十分前には学校に来てるのに今日は遅いじゃ……あれ、何で怒ってるの?」

茶髪でややツンツンヘアの男子はこちらを見てキョトンとした顔をしていた。

うん、誰だコイツ?

憑依したのは座標移動（後書き）

ちよいと女が主人公の小説も書きたくなったので書いてみました。
あと、チート結標さんも書きたいというのもあります

今の周囲の状況を簡単に把握しました

とりあえず今確認出来ている事を述べよう。

まず、私が通う中学は朝陽南中学あさひみなみという第七学区という特殊な能力を開発する事に念を置いている学校らしい。

将来進学するであろう霧ヶ丘に似たようなところがあるな。あそこも特殊な能力を開発させる学校だったはず。

次に私の能力の強度は大能力者《レベル4》だ。これはクラスメイトから教えてもらった。

という事は今の時点で自身をテレポさせる事も可能っぽいね。帰宅する時やってみようかな。

今日学校行って分かった主な事はこれくらいか。

ね……あ、今朝に私に無礼な挨拶をかましやがった男の名は霧ヶ峰きりがみ優ねというらしい。

原作にもアニメにもこんな奴はいなかった。まあ原作にもアニメにも出てないだけで結標淡希と交流がある奴は結構いるだろう。

今はもう全ての授業終わってホームルームに担任の教師が来るのを待っているが、霧ヶ峰は周りのクラスメイトとはしゃいでいる。

コイツはどうやらクラスのムードメーカーみたいな存在らしい。

それにしても常盤台中学とかに通いたかったなあ。

あ、でも美琴や黒子が入学する前に卒業しちゃうね。けど、心理メンタ掌握リアウトの食蜂さんにはギリギリ会えるな。

ん、先生が来たようだ。

「やあ。結標君」

ホームルームが終わり、放課後イベントも特に起こらず、校門を出た所で白衣を着た男に声をかけられた。

学園都市で白衣とか研究者以外に考えられないな。

「明日は身体検査システムスキャンの日だ。悪いけど能力の精度を確かめるために研究所に来てもらうよ」

身体検査が明日あるのは知っていたが、私こと結標淡希がどこかの研究所に所属していたってのは知らなかったな。

まあ座標移動ってただでさえ珍しい空間移動系列の中でも貴重な存在らしいから、専門の研究所があってもおかしくはない。

「ああ。そうだったわね。研究所へは徒歩で移動出来るの？」
「どうでも良い事だが私は会話する時は原作の結標と同じ口調で話す事を心掛けている。
特に意味は無い。ただ、演じるのがなんとなく楽しいだけ。」

「結標君、今日は体調がよろしく無いのかい？ 君の能力で研究所まで行くに決まってるだろ」

研究者っぽい男は怪訝な顔をしながら遠くに浮かんでいる赤いバールーンを指差す。

「えっ」

「さあ研究所の目印のバールーンまで僕と君自身を座標移動で移動しよう……どうした？ まさか本当に具合悪い？」

「いや、大丈夫よ。あはは」

多分これって能力を使いこなす練習か何かだよな。

私を送迎のパシリに使うためじゃないよね？

……ま、いいか。どうせ帰宅する時に能力使っつて決めてたしね。

「行くわよ」

研究者の男に肩に手を置く。

通行中の人間とかに間違えて転移したりするとおぞましいオブリエが出来ちゃうから、まずは障害物が少ない上空にテレポするかね。真上に障害物は無し、よし、まずは上空八十メートルくらいに座標移動　！

「お、おおおっ」

すげー！ あっさりとテレポできちゃったよ。

見る！ 人間がゴミのようだ！ ……うわっ、研究者の男がこっち不審な目で見てるよ。

これ以上変な目を向けられないためにもさっさと研究所まで行くか。

お次は前方へまた八十メートル　！

(よしよし)

先程よりバルーンが大きく見えるって事は今度も成功したって事だ。

座標移動を繰り返している内にバルーンの目の前くらいまで移動出来たので、次に地面の三十センチくらい上に転移する。誤って地面に足埋めるわけにはいかないからね。

「お疲れ様。いつもより精度とか能力を使う間隔が短くなっているんじゃないか？」

「あら、そうかしら」

「君は自分の能力を恐れている縁があったからな……少しはそれが薄れてきたのかな？」

「……………」

うーむ。原作の結標はそうだったかもしれないが、私は結標であつて結標でない人物みたいな人間だからなあ。

ぶつちやけ能力なんて私はただの便利な道具としか思つてない。

「いけない事聞いちゃったかな？」

「別に。気にしなくていいわ」

「そうかい。じゃあ行こうか、主任のところへ」

主任か。座標移動開発の主任の事なんだろうが、変な人物だったら嫌ですねー。

つつか、今気付いたがこの研究所は建物は平凡だが敷地はかなり広いな。

なんか期待されてるみたいでプレッシャーががが。

「行こうか」

研究者の男は先導して研究所内に入つていった。私はいつの間にか口の中に溜まつていた唾を飲み込み、彼の後に続いた。

今の周囲の状況を簡単に把握しました（後書き）

主人公は結構お気楽な人だから結構メンタル強いです

主任に会いました

中に入ってみるとロビーらしき空間が私を迎えていた。観葉植物や長椅子とかが置いてあるスタンダードな感じだ。

「ちょっと待つててくれ。今から主任の神山 かみやま さんに連絡つけるから」

研究者の男は白衣のポケットから携帯を取り出し、電話先の相手と何やらやりとりを始めた。

「神山主任、結標淡希が到着しました。……え？ まだ狩りが終わってない？ いや何ゲームなんかやつちやてるんですかアンタ」

おいおいなんか不安になってきたんですけど。頼む！ 変な奴はお断りだ！

「今日は帰って貰って、いくらなんでも理不尽すぎるでしょうが！ 呼び出したのはアンタだろ！ てか、結標君のメンタル面に問題がるのって絶対アンタの性格せいでしょう！ ……あ」

こっちみんな。

まあ、さつさと先に進めてほしいから愛想笑いして手振っとくか。失言は誰でもしちゃう事だ。

「え？ お前がうるさいからクエストに失敗した？ 知るかつ！！
あれ、切れた」

あーあ、今思えば学園都市の優秀な研究者は木イイイ原クウウウンみたいに変人が多いのかな。

今さっきの会話だけで変人フラグがビンビンだよ。もう、ここは腹を決めるぞ。

「ん？ エレベーターが動いてる？ なんだ結局来るのかツンデレさんめ〜」

研究者の微妙にキモい発言の通り、チーンというエレベーターが各階で止まる時のお馴染みの音がロビーに響いた。てか、今気づいたよエレベーターがあつたなんて。

あと、何でもかんでもツンデレにしちゃうのは良くないと思うよ研究者さん。

「光山ああああ！！」

「びぶるちっ！？」

今起きた事を説明しよう。エレベーターから飛び出してきた金髪ポニテの白衣着た女の人が研究者光山君を蹴り飛ばして、その勢いで飛んだ光山君が観葉植物の鉢植えに頭だけ埋まった。

それにしても原作SS2のモツ鍋さんみたいな断末魔だったな……ご冥福をお祈りするよ光山君。

「よー、久しぶり淡希」

「ひ、久しぶりね」

お、おお。何か思ったよりフレンドリーで悪くなさそうな人だ。それに美人巨乳だな。胸元が大きく開いた白衣から見える谷間がエロいぜ。

けど、あんまりこっちをジロジロ見るのはやめてほしいな。

「淡希……お前……！」

「どうかしたの！？」

「前来た時よりおっぱい大きくなってない!？」
「ズコーーーーーッ!!」

この人が男だったら確実に壁に埋めてたぞ。ああ、女でも黒子みたいなガチレズだったら埋めるけどね。

「いきなり何よ……」

「ふふ、冗談だ。さて、早速だが実験を行おうか」

「どこで」

「外で」

妙に外の敷地広いと思っただらやっぱりか。

神山に案内されて着いたのは学校にある運動場のような広い場所だった。

完全に殺風景な場所ではなく、アルファベットが書かれたコンテナがいくつか積み上げて並べてあったりする。あと何か建設に使うような重機も何台か置いてある。

「さて、まずは飛距離の検査から行おうか」

「何を飛ばせばいいの?」

「光山」

「!?!」

「というのは冗談であそこにあるアレをまず飛ばしてもらおうか」

良かった。もう少しで『もうやめてry』とか言いそうになっただわ。

アレって……ああ、あの楕円形の形した鉄の塊みたいなヤツか。

確かアニメで黒子がああいうの飛ばしてたよな。
とりあえずこっちに引き寄せてと。

「あ、ちよつと待った」

「まだどうでもいい事言うつもりじゃないでしょうね」

「お前確か自分の能力の精度を少しでも上げたいとか言ってたわよね？」

「そりゃあ精度が高いに越した事はないわね」

「お前の座標移動は普通の空間移動と違って始点と終点が固定されない自由度が高い能力だ。そこでだ」

背中に手を回して神山は何かを取り出した。

お、この黒い棒みたいなのはもしかや……！

「これは……」

「警棒兼用の軍用懐中電灯だ」

「この光で能力使用時の基準をつけろという事ね」

「おつ、察しがいいなさすがお前だ」

早速、懐中電灯の光を鉄の塊に当ててみる。

成る程、これはいい。光が当たっている物体だけを転移すると考えれば余計な演算は必要無くなる。

朝方の違和感があったのはこの懐中電灯という相棒が無かったからか。早速、足元に鉄の塊をアポトと。

「どんな感じよ」

「いい感じね。余計な演算の必要が無くなったわ」

「ふっ、それは良かった。じゃあ早速飛距離の検査を始めるが準備はいいか？」

「バッチリよ」

「今までの記録はその自重九十キロのソイツを五百メートルちょいだ。それじゃあ検討を祈る」

ちよい《・・・》っておい。アバウトだなー。いや、このアバウトさはひよっとしてメンタル的に弱い結標を気遣いとかだったりするのだろうか。

まあいいや。とりあえずこの広場の奥にまで飛ばすつもりでやっ
てやろう。

ッ！

『飛距離、千二百メートル』

「なっ!？」

「うえっ!？」

地面に幾つも設置されていた機材の音声を聞いて、思わず変な声
出してしまった。

せ、千メートル越え!？ え、原作の結標淡希さんの最高飛距離
を中二の時点で上回っちゃったよ!？

何これ憑依補正なの？ 転生オリ主がよく最強だったりするあれ
に近いものなのか!？ ……いや、少し大袈裟か。

「お、おま……淡希。一週間の内に何があつた!？」

こっちが聞きたいです。

主任に会いました（後書き）

さあ 結標淡希ん第一段階の強化が始まりました。

身体検査の結果は……

「た、多分貴方がこの懐中電灯をくれたお陰じゃないかしら」

「そんな……魔法のステッキを渡したんじゃないんだぞ。いきなりこんな……」

まぐれかもしれないからもう一度やってみるか？

近くにある分銅もどきを一度こちらに寄せて、もう一回！

『千三百メートル』

まぐれどころか記録伸びちゃったー！

「偶然の成果でも無いみたいだしなあ。お前、明日の身体検査で超能力者《レベル5》認定されるかもな」

「へー」

「意外とそっけない反応なのなお前。空間移動系初の超能力者だぞ？」

結標つて最高飛距離が八百メートルくらいで転移できるのは自重4・5トンくらいまでの物体だったよな。それで自身をテレポ出来ないから大能力者《レベル4》止まりで超能力者認定されてるんだっけか。

だから今の時点で超能力者判定されるのは当然、そう当然。と、思ったけどまだ飛ばせる重量の限界を測ってないや。

「次は転移出来る重さも測るか。……前の記録は五百キロちょい超えだったかな」

「また数値がアバウトすぎる」

「気にするな。ミリグラムとかまで測ったら鬱陶しいだろ、お前への気遣いだ」

自分で言っちゃうとただの面倒臭がりに見えちゃうよ神山さん。

「向こうにコンテナがあるだろう?」

「ええ」

「あれを飛ばしてもらおうと思ってるんだが……」

「重さはどれくらいあるの?」

「一つで約二千キロだ」

「いきなり凄くハードル上げたわね」

「いや何か今のお前だったら出来そうない気がしたんだが……無理か?」

「確かに飛ばせる距離は明らかに上がってる。という事は演算能力が上がってるって事だよね私。」

正直……やれそうだ。

むしろ今なら出来ない気がしない。

というか原作の結標の記録は四千五百キロくらい……今の私ならこれ上回れるんじゃないか? えーと何か手頃な物はないかな。コンテナを同時にいくつも飛ばすのはかなり大変な気がするのよね。

「あれってどれくらいの重さがあるの?」

私が指差したのはキャタピラ式の巨大なトラクターだ。恐らく建設用か何か用だろう。なんかアタッチメントつけられそうな部位あるし。

「七トンか八トンぐらいだった筈だが。ってまさかお前!??」

「ええ、そのまさかよ」

「……まあいい。やってみる」

よーしまず懐中電灯で標準つけてと。後は始点と終点を決めて演算する。

始点はそのトラクター、終点は私の十メートル前でいいだろう。

よし、やれる　！

「凄い……」

無事に、トラクターは指定した位置に移動した。

神山の驚く声が心地良いな……ッ！？

「淡希、おいどうした淡希！？」

身体中を突然襲ってきた違和感に耐えきれずに気付けば私は両手と両膝を地面に着けてしまっていた。

何だこれ三半規管が狂ったみたいに頭がくらくらする。しかもこめかみ辺りの血管が収縮する感じもするし、身体中から脂汗が吹き出てくる。

体に負担がかかっているのか……？　ああ、そういえば過度な演算をすればそうなるんだっけか。

「大丈夫か？」

神山が私の背中を擦りながら心配そうに此方を覗き込んでくれている。

とりあえず作り笑いを神山に向けて、立ち上がる。膝はまだ震えるがすんなり立ち上がった。

一時的に体調がかなり悪くなるだけで、ヤバい後遺症とかが残るわけではなさそうだ。疲労はかなり溜まったが。

そつだよ思い出した。原作では結標は千キロ以上の物テレポしたら体調不良起こすんだつた。

調子に乗りすぎちゃつたな。

「おい、歩けるのか？」

「大丈夫。一瞬だけ体調悪くなつただけだから」

「すまん。私が止めれば良かったのにな」

「いや、私が調子に乗りすぎたのが悪かつたわ」

うわ、なんか暗い空気になつてきた。この人意外と真面目なのな。

「……明日は身体検査だから今日はもう帰れ。家で体を休ませておけ」

「分かつたわ。今日は世話になつたわね」

「ああ、待て」

「何か？」

「そのまま帰れとか酷だろ。私が車出すからそれに乗つて帰れ」

やだ……この人優しい……

昨日帰つてすぐにダウンしたが、今日は特に体調不良が無いな。

今は身体検査受けるために学校運動場で順番待ちしているとこだ。

この学校の身体検査は番号順に行うらしい。

「結標さん！」

私の元に二人の女の子が走りよつてきた。

黒髪をポニテにした白木結（白木結さん）さんと茶髪ショートカットの神木絵里

さんだ。二人とも昨日、友好的に私に接してくれた人物である。

「そろそろ結標さんの身体検査が始まるんでしょ？ 私、自分の身体検査終わった後ダツシユで来ちゃったよ」

「白木さん、結標さんの番号は1108番だからまだ十分くらい時間あるよ？」

「特等席確保のためよ。結標さんが身体検査する時っていつも人混み出来るじゃん」

え、それ初耳なんですけど。

まあいいやギャラリーごときに屈する必要はない。

「二人とも身体検査の結果はどうだったの？」

「あたしは安定の大能力者判定でしたよ」

「私もいつも通り強能力者《レベル3》判定でした」

白木さんが発火豪雨で神木さんが心理調整メンタルアジャストだったか。

実は知ってるのは名前だけでどんな能力なのかは私は知らない。私に憑依される前の結標なら知ってたかもしれないけど。

「あーあ。今度こそ超能力者判定受けると思ってたんだけどな」

「それは絶対じゃないですよ」

「何い!？」

「この学校で超能力者判定受けそうな人って霧ヶ峰君か結標さんくらいだと思いますよ」

「ぐう……でも、結標さんは超能力者になれるかもとして霧ヶ峰はなんかムカつく」

霧ヶ峰……あのムードメーカーってそんなに能力凄いのか。気になるな、霧ヶ峰の能力のみ、気になるな。

「次、1108番。結標淡希」

ざわ……ざわ……。

今、私の後ろには千人くらいのギャラリーが立っています。やば
ば、少し緊張してきた。

あ、そつだ。

「すみません」

「何だ？」

「小道具って使用可ですか？」

「小道具とは？」

木陰にこっそりと置いていた懐中電灯をアポートさせ、検査官に
見せる。

「ああ、これくらいなら許可しよう」

「ありがとうございます」

「始めるぞ、配置につけ」

白線のラインまで歩き、とりあえず深呼吸する。

いかんいかん緊張しては駄目だ。別に超能力者判定受けないと死
ぬってわけじゃないんだから落ち着こうぜ私。

「まず、自身の転移を行ってくれ」

自分の転移だと……昨日まともな練習してないぞ。

座標移動って自分飛ばす時、普通の空間移動と違って自分を基準

に演算するんじゃないやなくて、始点と終点の演算しなきゃいけないから演算負荷が高いんだよなあ。

まあ、仮に埋まってももう一度テレポすれば皮ずり剥け回避できるからとりあえず覚悟決めて運動場の端目指して飛ぶか。

懐中電灯マジック ！

『飛距離記録 千二百二十五メートル』

ふっ、ざつとこんなもんよ。

私ともう一度テレポして定位置に戻るとギャラリーから歓声が巻き起こった。

ふふふ、ドヤ顔しちゃいそうになるなこれは。

「お、おい、お前懐中電灯に細工とかしてるんじゃないだろうな？」

あ、後で調べさせてもらっぞ

「お好きにどうぞ」

「……っ、次は自分以外の物体の飛距離を測るぞ」

よっしゃなんか自信ついてきた。どんどん来いやあ！

『自身飛距離	千二百二十五メートル
物体飛距離	千三百五十五メートル
最大重量	五千六百キロ
総合評価	LEVEL5

身体検査の結果。

ご覧の通り私、超能力者になっちゃいました。

身体検査の結果は……（後書き）

身体検査での最大重量が減ったのは主人公が体調悪くするのを恐れて少し自重したからです。

さて、次回から戦闘ストーリーや原作キャラ達を出す予定です。

【主人公の現在スペック】

【名前と年齢】…………… 結標淡希（14）

【性格】…………… 原作の結標よりも演算力高い、あと少しお気楽な性格だが人前ではクールぶる。

殺しはあんまりしたくないが必要ならばやる予定。

え？ ショタコンかどうか？ 知らんがな。先で分かるんじゃないんですか？

【能力】…………… 座標移動のレベル5。

最大重量は実は10トンまでいける。だが、7トンあたりから体に負担がかかってしまう。

最大飛距離は1300メートルちょいくらい。

懐中電灯無しだと精度が悪くなり、飛距離も重量も低下する。

飛ばせる物体はあくまで固体か液体のみ。

自身の転移は楽々となります。

【主人公の現在スペック】（後書き）

まだまだ結標はパワーアップします

したらこついつ風に書きます

レベル5になってからというもの……ん？ あの白い人物は……！？

超能力者判定されてから一ヶ月が経ち、結構私の生活は変わってしまった。

まず、かなりの金持ちになった。

奨学金も大能力者時代の奨学金明細書と現在の明細書を比べて三倍以上になってたし、超能力者判定祝いとして上層部の誰かさんから口座に五千万円も振り込まれていた。何これ怖い。

あと私の所属していた研究所が多くの人員や設備が送られてきて一気に騒がしくなった事が。

……これまでは嬉しい変化なんだけどね。

「テメエが第八位だな」

「ちよつと俺らと話していかない？」

こんな変化も起こってしまったわけだ。

最終下校時刻過ぎやちよつと人通りの少ない場所を歩いてるだけで頻繁にこういう馬鹿達に絡まれるようになった。

恐らく私が序列八位という超能力者の中で一番低いところに属しているから集団なら勝てるかと勘違いしてるんだろうな。強さ〓序列と考えてるなど愚か愚か。

ああ、一方通行と垣根は別よ。

……しかし、コイツ等にはそぎいたぐんは削板軍覇という禁書原作者公認の序列七位のチート野郎の存在を教えてやりたくなる気分だ。

あーあ、夜中にコンビ二行くくらい普通にさせてくれよ……小腹が空いたんだよ……

「用件は？ 喧嘩を売るなんて用件だったらお勧めはしないわ。怪

我なんてしたくないでしょ？」

「可愛い顔で凄まれても全然怖くないぜ？」

「ハッ、この人数を見てまだ余裕とはますますボコボコにしたくなつてきちゃったぜ」

「おいおい、あんまり傷付けるなよ？ 後で犯すんだからよ」

「その案にサンセー。俺に一番にやらせるよ」

ぶち殺すぞお前ら。

……ちよつと前だったらこの状況に陥ってたら迷い無く逃げた。しかし何度も何度も逃げている内に気付いた。キリが無い。

だから最近は絡まれたらそれなりの制裁を加えるようにしている。いつも逃げて「八位は逃げてばかりいる腰抜け。雑魚決定」とかいうれッテル貼られてますます絡まれるようになったら困るしね。

手にある懐中電灯をくるくる回しながら私は考える。

えーと。歩道を塞ぐぐらいの人数だが、ざつと見積もって三十はいるな。どうやって料理しようかな。

スカートのポケットに入れてる高級コルク抜きをぶちこむ価値すらないよなコイツ等。コルク抜きが勿体ない。

だからこれでいきますか！

「ひっ！？」

「か、体がツ……！」

とりあえず懐中電灯の光が明確に当たる十人くらいを胸の深さまで地面に埋めてやった。

「お、おい誰か引きずり出してくれえ！」

「やめた方がいいわよ」

「な、何で」

「地中と体が完全に密着してるのに引きずり出したりなんかしたら皮がずる剥けになっちゃうよ？ 私がもう一度貴方を転移させるなら話は別だけど」

「じ、じゃあ頼む……」

「嫌に決まってるでしょ」

「クソがあー！！ 調子に乗るんじゃないぞ！！」

後ろに控えていた無事な男達の内の一人在手のひらの上に炎を出現させていた。

パイロキネシス
発火能力か。恐るに足りない能力だな。

さて、今度はどう料理してやるのかな。近くにあるビルとかに転移させて建物の一部にでもしてやるか？

「邪魔だ。雑魚共オ」

！！！？

条件反射で耳を塞いでしまうような轟音が突然発生した。ついでに思わず両手で顔を庇ってしまう。

私が目を開いた時に見えたのは目の前に積み重なるように倒れている男達と滅茶苦茶に破壊された歩道だった。

「ンだア？ まだ生き残りがいやがったか」

この聞き覚えある声と口調。

電灯に照らされてますます白く見える髪と肌に爛々と光る瞳。

そして何よりこの破壊力抜群な能力……！ コイツは…… コイツは……ッ！

「おい、シカトこいてンじゃねエぞ」

いきなり一方通行きたああああ！？ ヤバい超カッコいいんですけどおお！？

多分、十三歳の一方通行さんカッコええええ！ 一般人とはオーラが違うわやっぱ。

「わ、私はコイツ等に絡まれていただけよ」

「あん？ 何だ、いつもの俺に楯突いてくる馬鹿共じゃねエのか」

ヤバい冷や汗が……生一方通行さんカッコいいけど、やっぱり怖いな。眼光がヤバい。

「つうかよオ、オマエ」

「ひっ！？」

「何で絡まれてたりしてたんだア？」

「多分だけど……私が最近超能力者判定されたからじゃないかしら」

「あア八位か。オマエ確か……座標移動って能力だったよな？」

「そうそう」

「遠目から見てたが、何でこんな雑魚共の相手なんかしてんだア？ オマエの能力だったら逃げる事も容易だよなア。ひよつとしてサドステイックな人だったりするんですかア！？ ギャハハッ！」

この人のツボが分からない。

ん、よく見るとコーヒーが沢山入ったコンビニの袋持ってる。おつとそういや私の目的はコンビニに向かう事だった。危うく忘れるところだったぜ。

てか、普通に会話出来るとは思ってた。まだ実験開始前から大分性格が丸いのかな。

「逃げ続けてたらキリが無いと判断しただけよ。適度に制裁してたら絡んでくる輩の数が減るかなと思ってるのだけど」

「なるほどねエ。イイ判断だ」

「そう?」

「オマエの場合はな」

「え?」

「オマエ八位だろ? 絡ンでる輩の思考は大体分かる。恐らく『序列が一番下の超能力者なら勝てる』とかだろ?」

その通りだけど一方通行の笑顔って何か怖いな。
それにしても、さっきから私ビビりすぎかも。

「ズバリ、その通りよ」

「まアさっきも言った通り、オマエの場合は適当に弾いてたら敵も減っていくだろオナ。だが、俺の場合は違いエ」

「『学園都市最強』だから?」

「そオだ。学園都市都市最強の座を狙う奴等はいつまでも蛆虫みてエに沸きやがる。ああいうクソ共は正直どうしようもねエな」

「大変ね」

「今んところは互いになア。……久々に長話してたら眠くなっちゃまった。ンじゃな」

私の隣を通りすぎながら一方通行は暗闇へと歩いていった。

あー、少ししか話してないけど何か貴重な体験したような気がするわ。

一方通行の言う事はマジであってほしいな。正直な話、絡まれる度に相手ボコボコにするのを一年くらい繰り返してたら精神が病みそうだ。

そういや一方通行はこの後『無敵』を目指す事になるんだよね……
んん、今日はもう色々と考えないようにしよう。コンビニだコンビニ。

「結標淡希が戦闘を終了。データは取りました。また、一方通行と接触したが特に問題は無し」

『了解。引き続き監視し、データを取るように』

レベル5になってからというもの……ん？ あの白い人物は……！？（後書き）

結構容赦がない結標さん。

今回はちょい原作ブレイクですかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531y/>

とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

2011年11月25日00時52分発行